第４回　アイリカ・クリシャール コンサート　ドイツ歌曲の夕べ

冬の旅



時：２月20日(土)16～18時
　　開場：15：30

於：堅田教会

出演
　アイリカ・クリシャール
　　（ソプラノ・リリコ）
　ベルンハルト・ヴュンシュ
　　（指揮者・ピアニスト）

演目
　冬の旅
　（シューベルト）
　　第1部：12曲
　　休憩(ティータイム)
　　第2部：12曲

鑑賞協力費：2500円
　教会の収容力のため、60名様までとさせていただきます。下記の堅田教会の電話かファックスで申し込んでください。
　先着順とさせていただきます。
　協力費は当日受付で納付下さい。

主催
　日本基督教団堅田教会
　堅田九条の会
　アムネスティ大津・坂本グループ

日本キリスト教団　堅田教会　　牧師　竹内　宙
〒520-0242　大津市本堅田三丁目１８－６
TEL. 077-572-0069　　FAX. 077-572-0229
Eメール　tonari1-23@church.email.ne.jp

Eilika – soprano lirico
アイリカ – ソプラノ・リリコ



「...誰がこの繊細な女性からホール全体に響く声が出ると想像しただろうか!?　彼女の声は大きなアリーナにおいても全聴衆に生の声を届かせることができるオペラの声である。モーツァルトのコンサートアリアでは彼女の声の音域の広さとダイナミズムの大きさに驚かされ、そのフォルテッシモはまるでなにか物を切ってしまうほどのメタリック性を持っていた。しかしシューベルトの歌曲においては、ビロードのようにやわらかく細やかな表現で歌ったのである。この晩彼女はメゾ・ソプラノのようなやわらかく暗い響きでリート歌い、同時にドラマティックなソプラノアリアをもこなしたのである。」（２０１１年5月1日　シュヴェービッシェ・ポスト紙）

１９８３年北ドイツ・東フリースラント地方で教会の牧師であり政治家でもあった父親の長女としてアイリカは生まれる。彼女の祖父である世界的に著名な、ヨーロッパ中世都市研究者のハインツ・シュトープ博士がもともと音楽家を志していたという影響で、５歳の時ピアノを始める。１６歳でアメリカ・サン・ディエゴで声楽を始め、２００２年ドイツ・デトモルト国立音楽大学声楽科に在籍するが、志半ばにて断念。その後ミュンヘンの哲学専門大学にて勉学。哲学と元来持ち合わせる詩と文筆の才能の頭角を現しつつあった２００５年、ミュンヘンでの小林春仁教授との運命的な出会いにより本格的に歌の世界に再帰する。日本で広島を皮切りに全国各地で１５０回以上ものコンサートを行い、彼女の歌声は広く知られていく。２００９年から福島で「アイリカ国際音楽祭」が始まった。２０１１年３月東日本大震災の日から彼女は福島の人々を助けるため日夜奔走し、彼女の友人でもある元ドイツ統一大統領クリスチャン・ヴルフ氏らにも協力を求めつつ、被災地の親子たちをベルリンに受け入れる一方、ドイツ中で被災地のためにチャリティー・コンサートを行い、同年５月に被災地を訪問し避難所を回りコンサートをする。ドイツに戻ってから災害の影響や疲れなどから５週間の病院生活を余儀なくされる。そのようなアイリカの真の愛情を持って何事にも深く情熱を傾ける心が彼女の歌にも表れている。２０１０年スイスのプレミウム国際オペラ・コンクールにて最優秀賞を獲得し、ヨーロッパの彼女を知る音楽家たちは、「アイリカの声は特別な声！」、「今まで類のない素晴らしい声！」、「パーフェクトな声のコントロール」、「将来歴史的な名を残す偉大な歌手になるに違いない！」などと絶賛している。日本では近い将来「日本が生んだドイツの歌の女王アイリカ」と人々に喜ばれる日がやってくることを熱く期待されている。２０１１年１２月フランクフルトで、現在ドイツを中心に名声を上げている指揮者・ピアニストであるベルナルド・ヴュンシュと録音したシューベルト、ヴォルフ、ツェムリンスキーの歌曲がオーストリア放送局で翌２０１２年１月に特別放送された。

一度歌をあきらめたアイリカが、ベルカント唱法の秘密を明らかにして本物のオペラ歌手の育成と、「声の治療は真の発声法からしかできない」と証明している“Ｋｏｂａｙａｓｈｉメソード”により、人間として不可能と思われるまでの完成度の高い声を手に入れることに成功し、今まで世界で女性が歌った録音が４本しかなかったシューベルトの「冬の旅」を２０１１年９月ミュンヘンでリリースし、プロとして本格的なデビューを果たした。その歌声と解釈の素晴らしさで、「今までの女性が歌った最高の『冬の旅』だ！」と歴史的名歌手シュヴァルツコップとフィッシャー・ディスカウのマスター・クラス伴奏者を務めたステファン・ラオックス氏が自信を持って言うアイリカの「冬の旅」であった。彼女の「冬の旅」ではとくに失恋の苦しみと痛みと失望が奥深く表現されていて、さらにその中でも同時に救いや幸福をも聴く人に感じさせてくれるのである。そしてその後すぐに２０１２年ベルリン・フィルハーモニー・ホールや、ミュンヘンの王宮劇場、クヴィレス・テアターのような有名な劇場やホールから出演依頼が相次ぎ、シュヴァルツコップやフィッシャー・ディースカウ、ヘルマン・プライ、ペーター・シュラーヤーなどの往年の大歌手の「冬の旅」やドイツ・リートを伴奏した歴史的名ピアニスト：イェルク・デームス氏は「アイリカの『冬の旅』は素晴らしい！できれば私もその伴奏をしたい！」と、手紙をしたためた。そしてベルナルト・ヴュンシュも彼女の声と音楽性を絶賛し、「２０１２年２月に日本で是非彼女の伴奏をしたい」と表明し実現した。彼女は「冬の旅」を今までベルリン・ミュンヘン・ミュンスター・東京・長野・そして彼女の日本でのデビュー地である広島で歌っており、いずれも聴衆に圧倒的な深い感銘を与えている。

「...この『冬の旅』でアイリカは聴衆に、『冬の旅』を元々シューベルトが書いた高い声域で歌うことの適正さを証明し、感動を与えた。『冬の旅』の世界に完全に溶け込み、時には静かにささやくように、そしてやさしく歌ったかと思うと、次の瞬間には力強く、聴衆を凍りつかせるかのように、苦しみと、痛みと、涙の『冬の旅』を歌ったのだ。」（２０１１年１月　ミュンスター紙）

Bernhard Wünsch
ベルンハルト・ヴュンシュ
指揮者・ピアニスト



１９６５年ドイツ、アウグスブルク生まれ。ヴュルツブルグとミュンヘンの国立音楽大学在学中すでに南ドイツ地方のオーケストラを指揮する。またザルツブルク音楽祭やバイロイト音楽祭にホルスト・シュタインのアシスタントとして関与し、またコーリン・デービスやロルフ・ロイターのマスタークラスにも参加し研鑽を重ねる。その後ビーレフェルト、ヴィースバーデン、ドゥイスブルク、ケルンそしてシュトゥットガルトのオペラ劇場などで指揮し、ラジオとテレビの出演や、ＣＤ録音もこなし、全ドイツ中のオーケストラ指揮をする。１９９５年以来彼は指揮者としてヨーロッパはもとよりロシアやヴェルター湖音楽祭、ノイシュヴァンシュタイン音楽祭でも名声を上げ、フランス、イタリア、スペイン、ベルギー、オランダ、ルクセンブルク、プエルトリコ、メキシコ、イスラエルでも客演指揮をする。

彼はロマン派から現代音楽を好み、１８～２０世紀のシンフォニー音楽のスペシャリストであるが、オペラ（ドン・ジョヴァンニ、トスカ、蝶々夫人、椿姫、カルメン、ローエングリーンなどを初め約６０にも及ぶオペラレパートリーがあるということは彼の若さでは驚異的な事と言えよう!!）、オペレッタ、オラトリオ、ミサ曲、さらにバレー、ミュージカル、上質な娯楽音楽や映画音楽も幅広く指揮している。またポピュラー音楽やミュージカル音楽のアレンジもこなし名を上げている。２００８年より映画プロデュース、イベント・ガラ・コンサートやコンサート・ツアーなどの企画をも北ドイツ放送局と共同で手がけている。近年はドイツ、ミュンヘン・フィルハーモニーのガスタイク、ハンブルクのレツィスホール、フランクフルト旧オペラ座、ベルリン・コンサートホール、そしてオランダなどでのコンサートの活躍も著しい。またピアニストとしても室内楽やリート伴奏に特に好んで力を入れている。現在ミンスク放送管弦楽団主席客員指揮者である。

堅田教会からの添え文

アイリカさんと堅田教会との出会いは、2007年のクリスマスを終えてホッとしているとき、ドイツからかかってきた一本の電話から始まりました。「小林春仁と言います。…教会でコンサートをしていただけないでしょうか」。普通ならこの手の面識のない方からの電話での依頼など、丁重にお断りするのですが、一瞬『もしや?!』との思いがよぎり「俊彦の弟さん?」と問うと相手はびっくりして「エーッ、どうして?!」…。こういう会話から始まったのですが、私はこの申し出を受けることにしました。

私の親しかった友人の弟が、国立音大を出てドイツに渡り音楽活動をしており、「日独音楽交流」としてドイツの若手の音楽家を引き連れて日本各地で『ドサ廻りの巡業』活動をしているのを知っていたので『もしや?!』と思ったのです。そしてその『想い』に応えたいと思ったのです。

こうして2008年2月、はじめての堅田教会でのアイリカさんのコンサート『デュオ・クリシャール　ドイツ歌曲の夕べ』が開催されました。のどを痛め声楽の道をあきらめていたアイリカさんが小林春仁さんと出会い、改めて声楽を基礎からやり直し始めて2年余がたった時でした。旅から旅、ホテルを転々としながらのコンサート活動の中で心身ともに疲れ果て、ホテルの空調でのどの状態も悪くなっているという最悪とも言える状態で、前日アイリカさんは教会に来、宿泊しました。2月初めのまだ寒い時、隙間風も入ってくる部屋の暖房は、石油ストーブと炬燵のみ。ドイツから来た25歳の娘さんにホテルも準備できない教会、「こんな部屋しかありませんが我慢してください」と恐縮しながら迎えたのです。しかしアイリカさんにとっては石油ストーブの上のやかんから出る蒸気、古い木造建築で化学物質の浮遊していない室内は『癒しの館』だったようでした。翌朝生気を取り戻しているアイリカさんを見て安堵しました。その時のコンサートの感想、おおむね『若いけど上手』との評価でしたが翌年のコンサートでは「1年でこんなに上達するのか?!」との驚嘆の声に変わりました。私たちは「成長期」のアイリカさんに接していたのです。3度目のコンサートを2011年5月20日に行いました。3/11の地震と津波、原発震災から2か月後のコンサートはチャリティコンサートとして行われました。実は2009年から福島で行われていた『アイリカ国際音楽祭』、この年も9月に福島市民会館で行われることになっていましたが、この3/11震災によりできなくなったという経緯がありました。幼少時ドイツでチェルノブイリの放射能を経験したアイリカさんは即座に行動を起こし、被ばく避難のためにドイツに疎開するチャーター便を飛ばすために奔走しましたが、日本政府の拒絶により実現しませんでした。。アイリカさんは芸術家や医師たちを組織し被災地の親子などをベルリンに受け入れた。そして5月に福島などの被災地に入り避難所を回りコンサートを行い、その帰途実現したのがこの第3回コンサートです。

今回のコンサートはその時以来となる4回目となります。その間にアイリカさんはヨーロッパで本格的デビューを果たされました。大いに楽しみなコンサート、みなと豊かな時を共にしたいと願います。（竹内記）

新聞掲載の評論（2012年9月19日シュヴェービッシュ・グミュント・レームス新聞）

2012年9月、ドイツ・シュヴェービッシュ・グミュントのシュヴェール・ハウスにて録音された、ソプラノ・アイリカとピアノ伴奏・ベルンハルト・ヴュンシュによる新作CD。カロル・シマノフスキーの「12の歌」作品17は今回の全曲録音は世界初であり、録音と平行して行われたコンサートでもセンセーショナルを巻き起こした。また同 コンサートで取り上げられたロベルト・シューマンの「詩人の恋」作品48も同時に収録。
その時のコンサートの評論が2012年9月19日シュヴェービッシュ・グミュント・レームス新聞に取り上げられた。

感動深きリート芸術の秘密

シュヴェール・ハウス・コンサートシリーズはアイリカとベルンハルト・ヴュンシュのリーダーアベントで幕を開けた．．．

非常に珍しい、そして素晴らしいリーダーアーベントをもって2012～13年のシュヴェール・ハウス・コンサートシリーズは先週日曜日に始まった。そのシリーズの幕開けとなるその晩、ソプラノ・アイリカとピアニスト・ベルンハルト・ヴュンシュはよく知られたシューマンの「詩人の恋」と、珍しいカロル・シマノフスキーの「12の歌」作品１７の、2つの組曲によるプログラムで私達を楽しませてくれた。カロル・シマノフスキーの「12の歌」作品17は後期ロマン派の作品で、それぞれの曲は詩的なものから、時として重苦しい表現の幅を持った作風であり、シマノフスキー自身も言うように、「昨日のものではなく、今日のそして明日のもの」を作曲しているように感じられる。

歌曲の解釈において、この2人 は最高級のものを持っており、アイリカは全く完璧な歌唱テクニックで私達に声を聴かせ、そしてそれは的確な色彩表現をこなすソプラノ歌手であることを深く印象付けた。彼女は声を文字通り「花咲かせる」時、特に強調したい彼女のこの世のものとは思えない程の驚くべきピアニッシモから、強靭なフォルティシモに 移っていくのである。そしてそれはカロル・シマノフスキーの「12の 歌」が多分に無調性音楽への世界に入りかけている作品であるからこそ、なおさら特注すべき大変な素晴らしい技であるのである。そしてまた、アイリカの特筆すべき点は、声のダイナミズムをうまく使い分けて、歌曲の劇性を作り上げていくところにもあり、しかしそういう中にあってもテキストの内容もわかりやす く、全く自然な感じで、楽々と無理なく歌うのである。そしてこの歌手の自由自在のヴィブラート法によって曲の解釈を効果的に強めるうまさはもうすでに大きな芸術であり、感嘆させられるばかりである。2人はこのシマノフスキーの組曲を長い発展豊富な、そしてその中にもはっきりとした周期性のあるシーン展開を持つものとして演奏したので、全体的に色々な面が見えたし、それぞれの違いがはっきりとして変容していくのがわかり、12曲すべての曲が感嘆すべきすばらしきものになったのであるが、それにはもちろん何と言ってもベルンハルト・ヴュンシュの偉大であらゆる箇所において忠実で適切な解釈を持ったピアノ伴奏があったからこそと言えよう。

「半ば痛み、半ば喜びの“春への憧れ”の魅力の中で」

休憩の後、アイリカとベルンハルト・ヴュンシュ は「感動深きリート芸術の秘密」の扉をロベルト・シューマンの「詩人の恋」で開いた。それは、溢れる暖かさ、力強い強調、ダイナミック性コントラストの的確な用い方、弾力性に富むしなやかさの叙情性をもっての演奏であった。シューマンの「詩人の恋」を聴いた人は、半ば痛みのある、半ば喜びの春への憧れの入 り混じった、靄の様な何ともいえない抗し難い魅力の中に引き込まれてしまう。また、作品中「春」が直接書かれていないときでも「詩人の恋」のハイネの詩 は、この四季感を絶えずはっきりと表しているのである。また数多いドイツ・リートの中で、この作品のように詩と音楽の表現がぴったりと相互に融合し、同時に繊細を極めているものは本当に少ないと言えよう。アイリカは「詩人の恋」のほのかな悲哀と歓喜の叫びの中を、また詩情と苦々しい恨みの間を行き来しながらも、叙情的主体をしっかり理解し、形作っており、何とも言い難い偉大な歌手である。その上、発声については究極とも言える完璧なテクニックを積み重ねてあり、声は非の打ち所のない素直で全く無理のない響きなのである。そして、このソプラノ歌手はこのリート歌唱芸術の技を一束にして、あっと驚くばかりの自然さで、わざとらしさのない表現を音にしてしまうのである。アイリカの正確な音楽表現の感覚は技量と一対になっている。彼女のソプラノの響きはすべての音域でバランスが取れている。彼女のダイナミズムの自由さは、テキスト内容の自然な表現を生み出すツールにもなっており、そのささやくような、それでもしっ かりと支えられたピアニッシモは、とろける甘さをも表出させ、時に高音域でのかぶせたフォルティッシモは壁でも打ち破ってしまうかの様な力をも見せるのである。そしてベルンハルト・ヴュンシュのピアノは絶えずこのシューマンの虹色に輝く陶酔する美しさに満ち溢れた音楽の特別な色彩感をかもし出していたのである。

最後に2人は聴衆の割れんばかりの拍手に答えて、アンコール曲として「詩人の恋」より再び「あなたの目を見つめるとき」を満ち足りた喜びの中で演奏した。